

平成 24 年度 公益社団法人  
日本動物学会第 3 回理事会議事録

日時 平成 25 年 6 月 8 日 (土) 13:00~18:00  
場所 北海道大学東京オフィス (東京都千代田区丸の内 1 丁目 7-12)

出席者: 理事 18 名

(阿形、岡、武田、出口、田村、赤坂、稲葉、窪川、蟻川、沼田、井口、高宗、内山、富岡、飯田、高畑、山下、尾崎)

監事 2 名(佐藤、長濱)

事務局: 永井

開会にあたり、武田庶務担当理事より、理事 18 名全員出席で、理事会が成立していること、また公益化後の議事録署名人は会長及び出席した監事となっていることが報告された。

定款第 33 条により議長は阿形会長が務めることとした。

## I. 報告事項

### 1. 科学研究費補助金の採択について (阿形会長)

以下の科学研究費補助金が日本動物学会として採択された。

学術誌 DB 1,400,000 円 (内定額)

~~情報発信強化 A (9 学会連携)~~

~~動物学会分 2,700,000 円 (編集補助、Citation Notice)~~

情報発信強化 B 動物学会単独申請

平成 25 年度 8,300,000 円

平成 26 年度 4,200,000 円

平成 27 年度 4,300,000 円

平成 28 年度 1,500,000 円

平成 29 年度 1,400,000 円

Zoological Science 掲載論文 3260 報で扱っている動物種の調査、アーカイブ化 Open アクセス化を進める。

UniBio Press 申請の 1 学会として採択された

情報発信強化 A (9 学会連携)

### 2. 庶務報告 (武田庶務幹事)

資料 1 に基づき新入会員 244 名の加入が報告され、入会を承認した。

### 3. 会計報告 (出口会計幹事)

資料 2 に基づき報告された。

会費納入状況、未納者への対応について意見交換を行った。特に会費未納会員への対応については、各支部でもう一度調査督促を行うこと、次回理事会までにルール（退会や再入会）を決めることとした。

#### 4. UniBio Press からの購読料返還について（永井事務局長）

資料 3 に基づき、返還料の説明がなされた。

#### 5. 平成 25 年度岡山大会について（富岡理事）

6 月 7 日正午で発表演題登録〆切。参加・演題登録は 824 件

演題 一般口演 580 件程度（この他にシンポジウム 16 件、関連集会 7 件を含む）

大会 2 日目に本部企画として、下村脩先生（ウズホール海洋生物学研究所）の講演会が開催される。

動物学ひろばは、大会 3 日目（9 月 28 日（土））に、岡山大学津島キャンパス、および学外の玉野市立玉野海洋博物館（渋川マリン水族館）を会場として開催される。

高校生によるポスター発表は受付中

#### 6. 平成 26 年度東北大会について（田村理事）

2014 年 9 月 11 – 13 日、東北大学・川内キャンパスにて開催（理事会は 9 月 10 日）

大会長は田村理事（東北大学）

#### 7. 平成 27 年度新潟大会について（赤坂理事）

2015 年 9 月 16 – 19 日のうち 3 日間を予定

大会長は濱口 哲 会員（新潟大学）

#### 8. 広報委員会報告（富岡理事）

資料 4 に基づき、報告が行われた。

「動物学会 Q&A ～高等学校の先生方へ～」 「男女共同参画」のバナーを HP のトップへ追加

#### 9. 男女共同参画連絡委員会（窪川理事）

資料 5 に基づき、報告が行われた。

幹事学会となって半年が経ち、順調に活動している。

シンポジウムの準備、HP の運営、会計の透明化、大規模アンケートの解析等大規模アンケート結果について、物理学会、応用物理学会、動物学会の 3 学会でそれぞれのデータを合わせて解析することが承認された。

学会内での活動：

大規模アンケート動物学会分（回収率 26%、620 名分）の解析（岡山大会ランチョンセミナーで発表予定）

就職支援（岡山大会での求職ロゴマーク）  
など。

#### 10. 将来計画委員会（山下理事）

資料 6 に基づき、報告が行われた。

#### 11. 図書出版について（高宗理事）

資料 7 に基づき、報告が行われた。2016 年日本で開催予定の国際動物学会にむけて、Springer からシリーズものの出版を承認。

#### 12. 教育活動について（赤坂理事）

資料 7 に基づき、報告が行われた。動物学会 Q&A を開設した。利用頻度は低いので、今後 HP 等で呼びかけを強めていく。

#### 13. 国際交流について（稲葉理事）

資料 9 に基づき、報告が行われた。

若手主体の国際交流シンポジウムを実施予定。招聘する研究者、時期、場所は今後調整  
2016 年の国際動物学会に合わせた企画も考えて行く。

#### 14. 渉外（内山理事）

3000 円以上の寄付者が 100 名近くに達した（H24.2 – H25.5）。総額 260 万円。

資料 10- 2011 年寄付者リストを参照。

寄付の目的、寄付金の使途については検討が必要（審議）

寄付者に対する、特に寄付を行った企業に対してのサービス（reward）について学会としての立場を明確にする必要がある。会長よりナリシゲ社長からの意見が披露され、展示ブースなどでの会員との交流に、支部会や大会主催者側の配慮が必要ではないか、という意見が出された。

#### 15 支部報告

資料に基づき、支部活動の報告が各支部長より行われた。

## 16. その他

### ・IT委員会（岡理事）

大会の参加・演題登録の新システム（ダイナックス）を導入した。~~フェー~~フィードバックを得ながら本部よりダイナックスへ修正依頼を行ってさらに改善する予定。

理事会での資料ペーパーレス化を Dropbox を活用して実現した。

委員会等の会議は Google hangout の使用を推奨。

大会プログラムのペーパーレス化は次回の東北大会から検討。

## II. 審議事項

### 1. 第1号議案 女性研究者奨励OM賞（大島委員長）

委員長より、選考経緯と受賞者決定の報告があり、承認した。受賞者は以下の2名。

湯山 育子 氏（静岡大学 創造科学技術大学院・学術研究員（非常勤））

研究テーマ「共生藻の違いがサンゴのストレス耐性に与える影響」

倉林 麻貴 氏（理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター・研究員（期限付））

研究テーマ「カタユウレイボヤにおける生殖細胞分化関連遺伝子の機能解析」

コメント：

結果的に動物学会員が受賞者であったが、会員ではない方からの申請には OM 賞の趣旨などが正確に理解されていないと思われるものが多数あった。賞の趣旨（目的、対象者など）が正確に伝わるように、申請書の様式を変更することを今後検討する。

### 2. 第2号議案 公益社団法人日本動物学会平成25年度事業計画について（武田理事）

資料11に基づき、平成25年事業計画案の説明があり、承認された。

### 3. 第3号議案 公益社団法人日本動物学会平成25年度予算について（出口理事）

資料12に基づき、平成25年予算案の説明があり、承認された。

### 4. 第4号議案 平成25年度成茂動物科学振興賞（会長）

委員長（会長）より、選考経緯と受賞者決定の報告があり、承認した。受賞者は以下。

浜中 良隆 会員（北海道大学大学院 生命科学院 行動知能学講座）

研究テーマ「ペプチド作動性ニューロンの分化を支配する遺伝子 *dimm* の形態学的機能解析」

5. 第5号議案 平成25年度教育賞について（会長）

委員長（会長）より、選考経緯と受賞者決定の報告があり、承認した。受賞者は以下。

矢島 稔 氏（ぐんま昆虫の森・園長）

教育賞では、今後推薦者のキャリアオーバーを認めて、新しい推薦者とともに毎年選考を行っていくことが承認された。

6. 第6号議案 平成25年度奨励賞について（沼田委員長）

委員長（沼田理事）より、選考経緯と受賞者決定の報告があり、承認した。受賞者は以下の2名。

沓掛 磨也子 会員（産業技術総合研究所・研究員）

研究テーマ「昆虫社会の成立・維持機構と進化に関する研究」

小柳 光正 会員（大阪市立大学大学院理学研究科・准教授）

研究テーマ「分子進化学的・分子生理学的アプローチによる動物の光受容の分子基盤の研究」

7. 第7号議案 平成25年度動物学会賞について（沼田委員長）

委員長より、選考経緯と受賞者決定の報告があり、承認した。受賞者は以下の2名。

岡 良隆 会員（東京大学大学院理学系研究科・教授）

研究テーマ「生殖の中樞制御にかかわるペプチドニューロン系の研究」

富岡 憲治 会員（岡山大学大学院自然科学研究科・教授）

研究テーマ「昆虫の概日時計機構に関する神経生物学的研究」

今回の申請では補足資料を添付したものがあつた。公平性を確保するために、次回から、補足資料の添付は不可とすることを推薦要領に明記することとした。また、作業の簡素化のため、次回から推薦書はpdfの電子ファイルのみを受け付けることとし、これも要領に明記する。

8. 第8号議案 感謝状贈呈について（赤坂理事）

赤坂担当理事より、全国臨海臨湖実験所会議で推薦のあつた方に、感謝状の贈呈の提案があり、承認した。対象者は以下の方。

関藤 守 氏（東京大学理学部附属臨海実験所・技術専門職員）

9. 第9号議案 平成25年度論文賞 Zoological Science Award 2011（藤井賞）について

理事会に先立って行われた Zoological Science 編集委員会から以下の 8 名の論文賞の推薦があった。理事会として承認した。8 名は以下。

#### Zoological Science Award 2013

Michio Sugahara, Yasuichiro Nishimura, and Fumio Sakamoto

Differences in Heat Sensitivity between Japanese Honeybees and Hornets under High Carbon Dioxide and Humidity Conditions Inside Bee Balls.

29: 30-36

ニホンミツバチがスズメバチ類を撃退するためにつくる蜂球に関する論文。これまでの研究から、蜂球内の温度と CO<sub>2</sub> 濃度の上昇がスズメバチを死に至らしめる要因ではないかと考えられていた。本研究では 4 種のスズメバチ、ニホンミツバチ、セイヨウミツバチを用いて、ニホンミツバチがスズメバチに対して形成する蜂球内の環境を解析することにより、CO<sub>2</sub> 濃度と湿度の上昇がスズメバチの熱耐性に影響する可能性について言及している。

Hiroki Hata, Rieko Takahashi, Hiroshi Ashiwa, Satoshi Awata, Tomohiro Takeyama, Masanori Kohda and Michio Hori

Inheritance Patterns of Lateral Dimorphism Examined through Breeding Experiments in Tanganyikan Cichlid (*Julidochromis transcriptus*) and Japanese Medaka (*Oryzias latipes*)

29:49-53

タンガニーカシクリッド (*Julidochromis transcriptus*) とメダカ (*Oryzias latipes*) を用いて交配実験により口吻部の左右性の遺伝様式を調べ、lefty allele が righty allele に対して優性であり、単純なメンデル遺伝を示すことを明らかにした論文である。左右性という形質が系統的に離れた種においても類似の遺伝様式をとることを示したこの研究は、左右性の表現型多型が生ずる遺伝学的メカニズムを探る第一歩として、興味深く重要な論文である。

Kyoko Kamiya, Keiji Yamashita, Toshiharu Yanagawa, Toyoki Kawabata and Kenji Watanabe

Cypris Larvae (Cirripedia: Balanomorph) Display Auto-Fluorescence in Nearly Species-Specific Patterns

29: 247-253

フジツボ類は船底や港湾施設の汚損生物であり、遊泳する幼生が基質に着底するキブリス段階での簡便かつ正確な種同定法が求められてきた。本研究は第一著者の博士論文研究の一部であり、キブリス幼生の自家蛍光パターンが種判別に有用であることを報告した画期的論文である。この技術はフジツボ類だけでなく他の小形動物にも転用できる可能性を秘めており、今後の応用研究が期待される。

Kazuya Kobayashi, Takanobu Maezawa, Haruka Nakagawa and Motonori Hoshi  
Existence of Two Sexual Races in the Planarian Species Switching between Asexual and Sexual Reproduction

29: 265-272

プラナリアの同一種の中に、有性生殖しか行うことが出来ない個体と無性生殖へも転換できる個体が存在することを実験によって見事に示した論文である。独自の実験系を利用して、性の進化や転換という動物学の根本課題に迫るというアプローチは、まさに動物学の醍醐味であり、今後の分子基盤の研究などへの発展も大いに期待されることから論文賞にふさわしいと考えられる。

Nahid Sultana Lucky, Ryo Ihara, Kosaku Yamaoka and Michio Hori  
Behavioral Laterality and Morphological Asymmetry in the Cuttlefish, *Sepia lycidas*

29: 286–292

コウイカの甲形態に左右性の違いがあり、その左右性とコウイカの補食行動の左右性（右から獲物を捕獲するか左から捕獲するのかが）正に相関することを示したこの論文は、研究例の少ない無脊椎動物における左右性多型とその進化的意味について形態と行動の2つの側面から挑んだ興味深い研究である。

Makoto Urata, Sadaharu Iwasaki and Susumu Ohtsuka  
Biology of the Swimming Acorn Worm *Glandiceps hacksi* from the Seto Inland Sea of Japan

29: 305-310

筆頭著者はこれまでギボシムシに関する系統・分類・発生・進化・生態といった幅広い分野にわたる総合的な自然史科学を推進しており、後口動物の進化を考える上で極めて重要なこの群に関する動物学的知見の増進に大きく寄与してきた。本研究で著者らは瀬戸内海の小久野島（「こぐのしま」乃至「こくのじま」）で発見したハネナシギボシムシを2年間にわたって定期採集し、詳細な飼育観察に基づいてその行動・生態を明らかにした。恐らく将来にわたってこの分野の教科書に引用され続けるであろう好論文である。

Shohei Komaki, Atsushi Kurabayashi, Mohammed Mafizul Islam, Koji Tojo, and Masayuki Sumida

Distributional Change and Epidemic Introgression in Overlapping Areas of Japanese Pond Frog Species Over 30 Years

29: 351-358

本論文は、日本中部における日本産の3種のトノサマガエル類の移入雑種形成と、生息域

による移入交雑過程の違いを示したものである。筆者らは、松本盆地と伊那盆地の30地点から合計233個体を採集し、それらに対するアロザイム解析と mtDNA 解析により、近接した2つの盆地間が接している地域での交雑、移入、特定種集団の消滅過程と地域による相違を示した。近縁種による交雑により従来の固有種集団が過去30年に縮小化し、今後消滅していく将来予測にも言及した重要な論文である。

Tomoe Hikosaka-Katayama, Kanae Koike, Hiroshi Yamashita, Akira Hikosaka, and Kazuhiko Koike

Mechanisms of Maternal Inheritance of Dinoflagellate Symbionts in the Acoelomorph Worm *Waminoa litus*

29: 559-567

2種の渦鞭毛藻と共生する無腸動物 *Waminoa litus* について、共生藻の卵への垂直伝播過程を組織学的に詳細に記載した論文である。無腸動物という系統進化的に興味深い生物を継続的に飼育維持しておこなった本研究は、左右相称動物では共生渦鞭毛藻の垂直伝播がきわめて例外的なこともあり、貴重な生物学的知見を提示するものである

Michio Sugahara, Yasuichiro Nishimura, and Fumio Sakamoto

Differences in heat sensitivity between Japanese honeybees and hornets under high carbon dioxide and humidity conditions inside bee balls.

29: 30-36

ニホンミツバチがスズメバチ類を撃退するためにつくる蜂球に関する論文。これまでの研究から、蜂球内の温度とCO<sub>2</sub>濃度の上昇がスズメバチを死に至らしめる要因ではないかと考えられていた。本研究では4種のスズメバチ、ニホンミツバチ、セイヨウミツバチを用いて、ニホンミツバチがスズメバチに対して形成する蜂球内の環境を解析することにより、CO<sub>2</sub>濃度と湿度の上昇がスズメバチの熱耐性に影響する可能性について言及している。

Hiroki Hata, Rieko Takahashi, Hiroshi Ashiwa, Satoshi Awata, Tomohiro Takeyama, Masanori Kohda and Michio Hori

Inheritance Patterns of Lateral Dimorphism Examined through Breeding Experiments in Tanganyikan Cichlid (*Julidochromis transcriptus*) and Japanese Medaka (*Oryzias latipes*)

29: 49-53

タンガニカシクリッド (*Julidochromis transcriptus*) とメダカ (*Oryzias latipes*) を用いて交配実験により口吻部の左右性の遺伝様式を調べ、lefty allele が righty allele に対して優性であり、単純なメンデル遺伝を示すことを明らかにした論文である。左右性という形質が系統的に離れた種においても類似の遺伝様式をとることを示したこの研究は、左右性の表現型多型が生ずる遺伝学的メカニズムを探る第一歩として、興味深く重要な論文で



ある。

~~Kyoko Kamiya, Keiji Yamashita, Toshiharu Yanagawa, Toyoki Kawabata and Kenji Watanabe~~

~~Cypris Larvae (Cirripedia: Balanomorpha) Display Auto-Fluorescence in Nearly Species-Specific Patterns—~~

~~29: 247-253~~

~~フジツボ類は船底や港湾施設の汚損生物であり、遊泳する幼生が基質に着底するキブリス段階での簡便かつ正確な種同定法が求められてきた。本研究は第一著者の博士論文研究の一部であり、キブリス幼生の自家蛍光パターンが種判別に有用であることを報告した画期的論文である。この技術はフジツボ類だけでなく他の小形動物にも転用できる可能性を秘めており、今後の応用研究が期待される。~~

~~Kazuya Kobayashi, Takanobu Maezawa, Haruka Nakagawa and Motonori Hoshi~~

~~Existence of Two Sexual Races in the Planarian Species Switching between Asexual and Sexual Reproduction~~

~~29: 265-272~~

~~プラナリアの同一種の中に、有性生殖しか行うことが出来ない個体と無性生殖へも転換できる個体が存在することを実験によって見事に示した論文である。独自の実験系を利用して、性の進化や転換という動物学の根本課題に迫るというアプローチは、まさに動物学の醍醐味であり、今後の分子基盤の研究などへの発展も大いに期待されることから論文賞にふさわしいと考えられる。~~

~~Nahid Sultana Lucky, Ryo Ihara, Kosaku Yamaoka and Michio Hori~~

~~Behavioral Laterality and Morphological Asymmetry in the Cuttlefish, Sepia lycidas—~~

~~29: 286-292~~

~~コウイカの甲形態に左右性の違いがあり、その左右性とコウイカの補食行動の左右性（右から獲物を捕獲するか左から捕獲するのか）が正に相関することを示したこの論文は、研究例の少ない無脊椎動物における左右性多型とその進化的意味について形態と行動の2つの側面から挑んだ興味深い研究である。~~

~~Makoto Urata, Sadaharu Iwasaki and Susumu Ohtsuka~~

~~Biology of the Swimming Acorn Worm Glandiceps haeksi from the Seto Inland Sea of Japan~~

~~29: 305-310~~

~~筆頭著者はこれまでギボシムシに関する系統・分類・発生・進化・生態といった幅広い分~~

野にわたる総合的な自然史科学を推進しており、後口動物の進化を考える上で極めて重要なこの群に関する動物学的知見の増進に大きく寄与してきた。本研究で著者らは瀬戸内海の小久野島（「こぐのしま」乃至「こくのじま」）で発見したハネナシギボシムシを2年間にわたって定期採集し、詳細な飼育観察に基づいてその行動・生態を明らかにした。恐らく将来にわたってこの分野の教科書に引用され続けるであろう好論文である。

~~Shohei Komaki, Atsushi Kurabayashi, Mohammed Mafizul Islam, Koji Tojo, and Masayuki Sumida~~

~~Distributional Change and Epidemic Introgression in Overlapping Areas of Japanese Pond Frog Species Over 30 Years~~

~~29: 351-358~~

本論文は、日本中部における日本産の3種のトノサマガエル類の移入雑種形成と、生息域による移入交雑過程の違いを示したものである。筆者らは、松本盆地と伊那盆地の30地点から合計233個体を採集し、それらに対するアロザイム解析とmtDNA解析により、近接した2つの盆地間が接している地域での交雑、移入、特定種集団の消滅過程と地域による相違を示した。近縁種による交雑により従来の固有種集団が過去30年に縮小化し、今後消滅していく将来予測にも言及した重要な論文である。

~~Tomoe Hikosaka-Katayama, Kanac Koike, Hiroshi Yamashita, Akira Hikosaka, and Kazuhiko Koike~~

~~Mechanisms of Maternal Inheritance of Dinoflagellate Symbionts in the Acocelomorph Worm *Waminoa litus*~~

~~29: 559-567~~

2種の渦鞭毛藻と共生する無腸動物 *Waminoa litus* について、共生藻の卵への垂直伝播過程を組織学的に詳細に記載した論文である。無腸動物という系統進化的に興味深い生物を継続的に飼育維持しておこなった本研究は、左右相称動物では共生渦鞭毛藻の垂直伝播がきわめて例外的なこともあり、貴重な生物学的知見を提示するものである。

10 国際動物学会議開催について（佐藤監事）

The 22nd International Congress of Zoology について、佐藤矩行会員（開催準備委員長）から報告があり、方針・概要が了承された。

場所：沖縄科学技術大学院大学（OIST）

期間：2016年11月12日（土）から17日（木）まで

参加予定人数：350から450名

基本方針：日本の動物科学の水準の高さを世界に示すことができる内容とする。

資金計画：OIST ワークショップ、財団からの大会補助等、準備委員長、執行部が連携して計画する。

国内大会との連携：九州地区が担当する平成 28 年（2016 年）動物学会大会が那覇市内で 11 月 17 日から 19 日まで開催される予定なので、今後両大会の連携を検討する。 九州地区が担当する動物学会大会は那覇市内で 11 月 17 日から 19 日を予定（詳細は未定）。

2013 年 6 月 25 日から 28 日まで北京で国際動物学会（ISZS）が主催する第 5 回の International Symposium of Integrative Zoology（ISIZ）が開催されるが、その席で長濱前会長が第 22 回の国際動物学会議（2016 年）の概要を説明する。 2013 年 6 月 25 日に開催される国際動物学会（ISZS）総会@北京、長濱前会長が国際大会の概要を説明する。

#### 11.各種委員会からの審議事項

- ・ Zoological Science 冊子体の有料化について（出口理事）

理事会に先立ち、Zoological Science 倉谷 滋編集主幹と理事との間で冊子体有料化について議論した。冊子体有料化の他に、Zoological Science と学会との関係、on-line の有料化についても意見交換を行った。これらの議論を踏まえて、理事会で審議した結果、冊子体有料化の本部役員提案（資料 17）は一部修正の上承認された。

#### 修正点

- ・「※前年度に 1 万円以上の寄付をしてくれた会員には ZS 冊子体を無償配布」は削除
- ・冊子体を希望している退職された会員に対する調査と配慮を検討する。

- ・将来計画委員会（山下理事）

グローバル化の提言について議論した。アジアのハブを目指すこと、大会の英語についての方向性は異論がなかったが、進め方、スピードなどについては多様な意見が理事から出された。

基本方針として、大会の段階的国際化は避けられず、大会準備委員会と協議しながら進めて行くこと、国際交流委員会（担当：稲葉理事）とも連携し進めること、については意見の一致をみた。

- ・図書委員会（高宗理事）

2016 年国際動物学会に合わせて、Springer から出版を予定しているシリーズ本の企画案について審議した。「多細胞動物の多様性と普遍性」を大きなテーマとして、シリーズの各 Volume の内容と編集者の選定を進めることが承認された。

Springer に提案前に、内容と編者について理事から意見をもらう（メール審議）。

Springer との契約の中身については、担当理事および本部執行部に一任する。

出版などで経験がある小泉 修会員（福岡女子大学人間環境学部）にアドバイザーとして入ってもらう。

・寄付金の使い方（会長）

寄付金は原則公共性の高い事業に使用することが提案され、了承された。

例えば、公開講演会、高校生のポスター発表など。目的指定の寄付金も今後対応していく。

・生物科学学会連合（生科連）からの緊急声明について（担当：武田理事）

「日本版 NIH 構想」が閣議決定される前に、ボトムアップ型の基礎生物学の重要性をアピールする声明が急遽生科連から出されることになり、学会として賛同を求められている。

これに関する背景、現状の説明が会長、武田理事、長濱監事よりなされた。審議の上、生科連の声明に、動物学会としても賛同することを承認した。

上記の決議を明確にするために、本議事録を作成し、本会定款に則り、議長と議事録署名人が記名、押印する。

平成 25 年 6 月 24 日

議長

議事録署名人

議事録署名人